

文体論とテキスト言語学

——コセリウ（1980）との連関——

能 登 恵 一

I 章 文体論の諸相

(1) はじめに

記述文法が言語の形式と機能の個別的規則の普遍研究であるのに対し、文体論は言語のテキストのレベルでの諸問題を扱う研究分野であり、それは普遍的であると同時に個別的でもあろうとする。この言語表現の学としての文体論は、その中心的な課題を文学テキストの解釈に当てはめていこうとする歴史を背後に担ってきた。

(2) 文体ならびに文体論の一般的定義

「文体」Stil/style というこの概念は一般に芸術作品についての価値判断が含まれ、「文体」は生産というポジティブな特性を持っている (Sayce, R. A. 1975: 304)。その結果、H. ザイドラーの「文体とは言語作品においてすべての言語の力を傾けて得られる横と縦に広がる人間的なものの創造である」(Seidler 1963: 70) とする定義は自然である。いわゆる文学的文体論が「言語の人間的な特性の研究」(ebd. 58) であるのに対し、言語学的文体論においては文体は発見されるもので、その発見の記述手段として言語学が用いられてきている (Beaugrand, Dressler 1981: 17)。この言語学的文体論に

あっては文体の捉え方は様々であるが、殆どすべての研究を通じて、基本的には、文体とは一個ないし一連のテキストを生産するためのいくつかの対立する選択肢の中から特徴的なものを選び出しているという考えが反映している (ebd.)。すなわち文体を生じさせる要素は言語運用によって一定の規範の下に置かれた言語的諸要素の間の選択の可能性にあると見るのである。そうした考えに裏付けられた文体論の研究の辿る道は勢い、テキスト生産者の意図的表現の効果とテキスト受容者が得る印象的效果を調査し、追及してゆこうとする傾向を持つことになる。そうした傾向はフランスの文献学者に多くみられるもので (Sayce : 299)、たとえば、文体論研究は「何らかの言語表現が記号として読者の注意をひきつけるあるいは喚起する特性の研究である」(Riffaterre 1978 : 99) とするこの M. リファテールの指摘はまさしく現代の言語学的文体論の大きな流れを代弁しているものといえることができる。こうした文体はいわば対立の体系であり、テキスト生産者の意図的なコントラスト、テキストの内に含まれる言語的コントラストによって生れるものである。その意味での文体論の任務は、「作者が意図したものの中でもっとも意識的なもの、意図されたものを伝える特徴」(ebd. 40)、しかもその特徴が当該のテキストに大きな意味を持つものを選び出すことであるといえよう。この考えの背景には、テキストはそのテキスト生産者の意図に基づいて調和的に構成されているという前提がある。すなわち、そこではテキストの伝達内容ではなく、方法それ自体、言語の美的機能が相対的に前面に押出されているときにそのテキストの文体が生じるということになる (Coseri 1980 : 59)。

(3) 言語学的文体論の課題

言語学的文体論は数多くの可能な選択肢の中から当該のテキストのもっとも特徴的なものを選び出すという意味で、言語表現であるテキストの形式的なレベルでの研究であることはいうまでもない。ラングの構造を記述するという伝統では統語論的、辞書的、形態的なレベルでの選択によって生み出された文体を発見し、記述する方法が考えられる。この選択の結果は小さな言語単位では比較的容易に発見されうる。しかしその選択肢を「発話行為」お

よび「発話行為の連続体」の中につけるには新たな言語理論が必要となる。「テキストの種類」および「発話行為の連続体」の諸相を記述し、文体特性を明示し、それによって生じる形式化の方法ならびに規範となる形式化の相違を記述することも一つの方法として想定できよう。

一般的に言語学的文体論にあっては、文体とはソシュールの意味でのラングあるいはその細分化したもの、ないしは言語能力の特徴として記述される。しかし多くの場合、上にみてきた通り、言語の総体から個人的選択によって生じるものが文体である、というのがこの言語学的文体論の中心を占める理念である。その結果記述されるのはテキスト生産者の意図ではなく、結果としてのテキスト部分の特徴そのものである。発見の為の道具としてもっともよく取り上げられるこの「逸脱」*Abweichung*の問題はテキストにおける逸脱を生成する能力およびその「逸脱」が当該のテキストにおいて何らかの有効性を持つ上での規則性をうちたてるといふ試みがなされるのでなければ、それはテキスト分析という「科学性」を隠れみのとした分類作業であるといふ批判をかかわすことはできない。E. コセリウは「逸脱の文体論」*Abweichungsstilistik*について「規範が十分に検証された言語運用と比べた上で、逸脱を発見し、記録するのでもなければ文体論とはいえない」と批判し、「このいわゆる『逸脱の文体論』はその視点を『逸脱』そのものではなく、このおもてに現われた逸脱内部の規則性に向けなくてはならない。逸脱のこの規則性はテキストの中に直接現われるもの以外の何ものでもない」(Coseriu: 119)と指摘している。M. ビーアビッシュはその論文「詩学と言語学」(1965)において詩的能力と関連して詩のテキストにおける一般の文法からの逸脱の問題を考え、詩的テキストにおける一種の逸脱の規則性を構想したのであるが、この問題はその後見るべき展開がない。言語学的文体論が、ある所与の思想がめざそうとする効果全体を盛り上げる為に必要なあらゆる状況をその思想に付け加えるもの、それが文体であるという考えに立脚して、形態的分析に終始している限り、それは古代の修辞学の域から一步も外に出ることはできないのである。言語学的文体論が究極において求めていくものは、テキストのレベルにおける規則性のスカラによって公理を発見し、そのテク

ストの内在的、自律的な特性に依存しつつ、ことばの直感的な価値判断とパラレルにその有効性をみつけだしていこうとする研究態度でなくてはならない。

II 章 コセリウのテキスト言語学

(1) テキストの定義

言語は一方ではそれぞれの人間によって実現される共通した営みであり、また他方ではその営みにあたり、個々の人間は歴史的な規範をよりどころにするものであるという考えに立脚し、言語を普遍的、一般的に特徴づけている (S. 6)。そしてこの普遍的な人間の行為としての言語を次の三つに分類し、このうちのレベルの一つとしてテキストを位置付けている。1)「普遍レベル」die universelle Ebene; 話すという行為一般、2)「歴史的レベル」die historische Ebene; ドイツ語、フランス語、ロシア語等歴史個別言語、3)「発話行為のレベル」die Ebene der Sprechakt; 一定の状況下での一定の発話者によって実現される発話行為の総体 (S. 7)

コセリウはテキストを第3)のレベルにおいて規定する。コセリウは上の分類を文法の分野について次のように当てはめて考える。

発話(ないし言語) = 文法理論, 一般文法

個別言語, 発話の歴史的伝統 = 記述文法

発話行為, テキスト = 文法的分析

ここで重要なのは一つづつ段階を踏んで規定していくという意味での体系的な順番である。すなわち一般的な意味での発話が定義されるのはある種の伝統的な意味の中であり、それに基づいてこの一定の歴史的な伝統を背景にもつ発話が「テキスト」として定義されることになる。そしてこの「テキスト」のレベルでこそ文法的分析がなされると考えるのである (S. 8)。ここでいう文法的分析とは語用論上の記述ではなく、発信者と受信者、発話内容、発話状況そして発話の対象すべてを含めた分析方法を指す。コセリウは「テキスト」をこのように規定した上でテキスト言語学のとるべき方向を示唆する。まず一般的なレベルでのカテゴリーの同一化をはかる。ついで歴史的レ

ベルでのそれらのカテゴリーの有無ならびに機能の在り方を調べ、最後にテキストのレベルで、そこにあらわれた内容上のカテゴリーが何を表わしているかを決定することが必要であるとするのである。ここで既に明らかなように、コセリウにあっては「テキスト」は必ずしも個別言語を意味しない。

(2) テキスト言語学

コセリウはこのようにテキストを規定した上で、二種類のテキスト言語学を想定する。すなわちその対象を個別言語の構造化のレベルにみるという「テキスト文法」Textgrammatik と、特定の言語のそれぞれの相違を越えた「言語的なもの」das Sprachliche という自律的なレベルでのテキストである (S. 27)。特定の言語のこのそれぞれの相違を越えたレベルでのテキストを対象とする言語学、それがコセリウの提唱する「テキスト言語学」なのである。

コセリウは文法的な分析の最後の単位としての文に執着していたのでは考察できないような諸種の要因を取り上げることがテキスト言語学の課題であるという立場から、「テキスト文法」の方法も認める。しかしコセリウにあってはそのテキスト言語学の根底をなしているものは、発話者のレベルおよび個別言語のレベルからは説明できない「言語的なもの」という自律的なレベルである (S. 35)。

コセリウにとっての「テキスト」はことばを越えた世界によって条件づけられている。コセリウによれば、「テキスト」こそことばを越えた世界、陳述の仕方に大きく関与し、まさしくことばを越えた世界の構成の相違に影響を受けるのはテキストであって、個別言語ではないのである (S. 39)。この個別言語のレベルでテキストを捉えようとする理由の一つとして特記すべきは、文学テキストの構成はある種の歴史的な規範に従った言語の伝統には依存しない、独自の伝統といったようなものと指摘する点である。(S. 40)。

(3) 意義の言語学としてのテキスト言語学

こうした基本的態度に立った上でコセリウは、テキスト言語学「意義の言語学」Linguistik des Sinns として捉える (S. 51)。意義の成立と意義の理解の仕方が、この「意義の言語学」の基本問題として設定されている。コセリウは意味と言語記号の直接的な結び付きを否定した上で、テキスト内の意義の構成成分である言語記号と意義の関連性を指摘する。そしてコセリウはテキストを構成する言語的要素を「意味」Bedeutung 「表示」Bezeichnung に分類する。われわれはテキストを理解するにあたりその構成要素であるこの両者を理解すると同時に、さらにそこから生じる示唆的なものを理解する。これがコセリウのいう「テキストの意義」なのである。コセリウにおいてはこの「意味」、「表示」そして「意義」は次のように定義される (S. 47)。

言語一般、発話一般の機能、すなわち「世界」におけるもろもろの対象ならびに事実関係を表わす機能の総体は一種の言語内容とみなすことができる。この種の内容が「表示」Bezeichnung である。特定の言語によって表わされる事柄の総体はある一定の言語によって理解される特殊な言語内容といえ、それが「意味」Bedeutung である。そしてテキストだけを理解の媒介とするものの総体、つまりテキスト内容として存在する内容の総体が「意義」Sinn である。

これは図式的には次のように表わされる

世界	表示機能	表示
個別言語	個別言語機能	意味
テキスト	テキスト機能	意義

コセリウは「表示」と「意味」ならびに「意義」を次のような観点に立って捉えるのである。「表示」はどの言語記号によっても可能であるが、その「意味」は個別言語によって実現される。この両者が一体となってテキストにおいてより程度の高い、より複雑な内容の単位のための表現内容、すなわち「意義」をつくりだすのである。ソシュールの用語にならえば、「意味」

と「表示」はシニファンであり、「意義」はシニフェということになる。コセリウはテキストを二重の記号論的關係で捉える。テキストを構成する言語記号はその記号と諸種の規則を知っているものが理解できることを意味し、そして表示する。それは第一次記号論的關係である。理論的にはこの第一次記号論的レベルですべてを理解することも可能ではあるが、第二次記号論的レベルが表わすものは一切把握できない。すなわち意義は理解できないのである。

(4) 意義の言語学と文学

テキストの意義については大抵文学テキストあるいは詩的テキストとの関連の中で問われるわけだが、コセリウはここで、さきにも触れた通り、逸脱の文体論に疑問を投げ掛ける(S. 51)。テキストはどんなものであれ意義をもっている。それはひとり文学テキストに限られたことではない。しかも詩的言語あるいは詩的テキストが必ず規範的な言語、規範的なテキストから逸脱するとはいえない。コセリウにとってテキストは文法分析の対象となるものだが、コセリウのいう意味での「テキストの意義」はテキスト生産者とテキスト受容者との相互行為において成立するものだといえよう。ことばの形式に終始していたのではテキストというレベルでの文体論、すなわちテキストの意義は発見できないのである。

(5) 意義とコミュニケーション理論

コセリウのテキスト概念は、テキストの全体として受容者に対して担っている意義の解釈に重点が置かれ、その背景にはコミュニケーション理論的テキスト・モデルがある。ある発信者のテキストがいかなる意義を形成して、テキスト意義を持つか、すなわち受信者においてテキストの意義がいかに受取められるかを解明するものである。コセリウはこの意義の構造を解明するにあたり、K. ビューラーのオルガノン・モデルを検討し、ビューラーの提唱した三機能を批判する(S. 65)。ビューラーの図式には送り手と受け手ならびに伝達される事柄そしてその中心に記号が位置する(1965)。コセリウはビ

ビューラーのこの図式には「伝達内容」das Mitgeteilte が欠けているというのである。コセリウは事柄とシニファンとの直接的な関係を否定する。コセリウのテキスト言語学にとって重要なのは伝えられる事柄そのものではない。それは個別言語にあっては意味であるのだが、テキストレベルにあってはそれはテキストを媒介として受容者において生みだされる意義なのである。この意義の成立とその理解の問題に対してビューラーのオルガノン・モデルでは完全な答えは求められないとするのである。

R. ヤコブソンはビューラーのこのオルガノン・モデルに言語の美的機能を付け加えるわけだが、コセリウはヤコブソンのコミュニケーション理論における詩的機能に疑問を呈する。ヤコブソンにあっては「言語の詩的機能ではメッセージは自らに向けられ、自らのうちにある価値を志向する」(Jakobson 1966: 356)のである。ヤコブソンの解釈からすると、詩的言語とは、テキストの形成に向けられた、綿密に計算された特別なものといえよう。そうすると、当該のテキストが「美的」ないし「詩的」であるとみなされるのは、表現それ自体の問題であって、コセリウのいう「伝達内容」はその対象とならないことになる。すなわち、ビューラーならびにヤコブソンのコミュニケーション理論ではコセリウの「テキストの意義」は解明できないのである。コセリウが問題とするのはいかに自己を伝達するかではない。何を伝達するか、すなわち伝達内容にはかならない。ここでコセリウはビューラー、ヤコブソンのコミュニケーション理論を変更したかたちで、記号の機能、記号の複合体としてのテキストの記号の機能を考え、それぞれのテキストが現われる環境を次のように図式する(S. 94)。

UMFELDER

I SITUATION	-unmittelbar -mittelbar
II REGION	-Zone -Bereich -Umgebung
III KONTEXT	-a) einzelsprachlicher Kontext

-b) Rede-Kontext

mittelbar	unmittelbar	
		positiv
		negativ

-c) Außer-Rede-Kontext

1. physikalisch
2. empirisch
3. natürlich
4. praktisch oder okkasionell
5. historisch

partikulär universell

		aktuell
		vergangen

6. kulturell

IV REDEUNIVERSUM

この図式は次のように説明される。「場面」SITUATIONとは一般的に理解されるよりも一層特有なものである。ここで問題となるのは発話それ自体、すなわち発話者が受信者に対してある一定の時空である事柄について発話しているという事実によって生じる時空における環境および関連である。したがって、場面とは、発話行為によって発信者の周囲に結集される時間-空間のレベルであり、それによりそこでは様々な空間的、時間的、個人的指示が範疇的な意味を越えて、具体的な事柄を表わすことができる (S. 94)。「直接的場面」unmittelbar とは発話行為と時間-空間の関係をいい、「間接的場面」mittelbar は発話内容あるいは発話の客観的事実そのものと関わるものを表わす。「区域」REGION とは記号区域であり、これは話者の伝統と知識によって異なる。この「区域」はさらに「地域」Zone、「領域」Bereich、「周囲」Umgebung の三つに分類される。「地域」とはある記号が知られ、一般的にその記号が用いられる世界で、歴史的言語に相当する。「領域」とは記

号表示されたものが話者の日常的な生活の世界の親しみのある対象であり、一般文化的なもので、言語的ではない。たとえば「家」のようなものが区域である。これに対し、「周囲」というのは「家族」、「学校」、「職場」といった社会的あるいは文化的に規定された世界である (S. 90)。「脈略」KONTEXT は「個別言語的脈略」*einzelsprachlicher Kontext*、「談話脈略」*Rede-Kontext*、「談話外脈略」*Außer-Rede-Kontext* に分類されるが、この図からも明らかな通り、「脈略」とは記号をとりまくすべての現実をさし、言語記号ならびに非言語記号よりなる。「個別言語的脈略」とは発話される言語そのものをさし、「談話脈略」ではテキストの先行部分ならびに後続部分が重要な要因を構成している。「物理的談話外脈略」*physikalisch* とは記号が直接関与する事物との関係をさし、「経験的談話外脈略」*empirisch* は受信者との直接的関係において認知される対象であり (S. 96)、「自然的談話外脈略」*natürlich* は経験的脈略の総体で、「物理的談話外脈略」*praktisch* は一般に「場面」と理解されているもので、省略した内容が受信者において正しく了解されるという脈略である。そして「歴史的談話外脈略」*historisch* は発信者が承知している歴史的な状況の総体であり、個別的なものは「家族」、「村」といった非常に小さな共同体での脈略を表わし、相対的なものは「国民性」、「文化」、「共同体」といった広範囲な歴史的構成をいう (S. 98)。「談話世界」*REDEUNIVERSUM* とはあるテキストを構成し、その妥当性と意義を生じさす意味の全体的体系をいう。神話、文学、科学、数学といったわれわれの実際の生活の世界はわれわれの談話のテーマになる限りにおいて、談話世界となる (S. 100)。

(6) テキストと脈略

コセリウがそのテキスト言語学においてもっとも重要視しているのはテキストの持つ機能である。テキストはどのような脈略の中で、どのような意義を持ち、どのような効果を持つかということがそのテーマになっているのである。コセリウはここでイェルムスレウのコノテーションの機能を考慮する。イェルムスレウにあっては言語はデノテーションの体系として理解されてい

る。すなわちその解釈は表示の機能という意味でなされる。しかしそこから表示的言語体系としての言語の可能性が示唆される (S. 103)。K.バウムゲルトナーによれば、イェルムスレウにあっては記号モデルは a)「実体」である変数 Variable を前提とする「形式」たる定数 Konstant, b)「表現」である変数と「内容」の定数, これは相互の前提条件となっており, この a) と b) の両者が相関的に含まれているときに記号は記号として機能することになる (Baumgärtner 1969: 21)。イェルムスレウのこの記号モデルをコセリウは次のように展開し, 意義の言語学を確立する。実現された記号とその周辺の関係はテキストの意義に貢献することはあってもテキストの意義をつくりだすことはできない。コノテーションにあって大切なのは記号の機能 Zeichenfunktion であるが, コセリウのいう意義はいうまでもなくテキストの機能 Textfunktion である。だからこそそれぞれのテキストにとって重要なのは脈略なのである。コセリウはテキストにその意義をあたえるのは一それが言語的脈略であれ, 言語外脈略であれ一脈略以外の何ものでもない, と主張する。テキストが意義を持つ要因が脈略である例としてコセリウは次の例で明らかにしようと試みる (S. 107)。

1) Ich habe Häuser gesehen, ich habe Wälder gesehen, ich habe einen Fluß gesehen, ich habe Menschen gesehen, ich habe Tiere gesehen.

2) Ich habe Häuser gesehen, ich habe Wälder gesehen, ich habe einen Fluß gesehen, ich habe Menschen gesehen, ich habe Tiere gesehen, Gott habe ich nicht gesehen, ich habe den Tod gesehen.

1) のテキストは単調で, しかもそこには内的関連性はない。これでは「見たものの報告」でしかない。だが, 2) のテキストではおなじ意味と表示の表現ではあるが, それは新しい脈絡の中でまったく別の意義が生まれ, ひとつのまとまりをなしていることがみてとれる。

このようにコセリウは意義の成立の要因を言語のコノテーション機能ばか

りでなく、テキスト内における他の記号とコノテーション機能との共同作用にあるとみるのである (S. 109)。

(7) テキスト文体論としての意義の言語学

コセリウはビューラのオルガノン・モデルを修正したかたちでテキストを捉えていることから明らかな通り、コセリウにおいてはテキストの概念はコミュニケーションの過程として捉えられている。コセリウが問題とするのはテキスト文法ではない。テキストの全体として受信者に対して向けられる意義の問題、その現われ方そしてその解釈こそコセリウのテキスト言語学の中心課題である。すなわちその発話行為としてのテキスト・モデルは意義の階層的各部分が相互に関連を持ちつつ、全体としてテキストの機能となっているその意義の解明がコセリウが求めるテキスト言語学の目標なのである。

「表示」は一般的な談話のレベルにあり、「意味」は個別言語のレベルで構成され、「意義」はテキストのレベルで生産される。コセリウのテキスト言語学は文学テキストを対象にするが、それは文学テキストが最高の程度においてその意義の展開の可能性に対応しているからである。この意味でコセリウのテキスト言語学はまさしくテキストの文体論であり、解釈学そのものなのである。

III章 お わ り に

言語学的文体論に課せられた任務は、受信者に対する「発話行為の特性として文体を記述すること」(Sandig 1978: 61) である。その意味で言語の美的機能を対象化してきた言語学的文体論の業績は評価できよう。文学テキストは生産者と受信者間の一種の美的コミュニケーションとして位置付けられよう。「詩的テキストはその言語的状况によってしか詩的对象として決定されないのであるから、この包括的伝達は発信者と受信者の間のコミュニケーションに限定しなくてはならない」(Baumgärtner: 37) ことはいうまでもない。ヤコブソンの言語の詩的機能は認めつつも、詩的なものがそのものとし

て受け入れられるのは脈略の効果であって、記号そのものではないとする、コセリウの考えにはうなずけるものがある。ところで文体記述に必要なことは、行為の様相と表現の様相を関連づける発話行為の理論であるといえる。意義の言語学を立てる為に、ビューラーとヤコブソンのコミュニケーション理論を新たに展開していくコセリウのコミュニケーションの理論はこの意味で正当に評価されよう。コセリウはテキスト生産者の意図を各節、各章の意義が全体となってテキストの意義を構成するという点にみる。しかし個々の文体は、言語表現という普遍性に立ちながら、同時に個性的なものの顕現である。こうした言語表現の主観的側面を可能な限り客観的にその基準をたて、文学テキストにその文体特性を対象化していくことが、言語学的文体論の仕事でなくてはならない。文学テキストはテキスト生産者の意図と言語の美的機能そしてテキスト受容者の立場を抜きにしては考えられない。言語学的文体論はテキスト生産者の意図と言語表現というレベルから探ろうとするもので、それはどこまでも客観的でなくてはならない。しかしそれが客観的であろうとするあまり現象の分類作業にとどまることはもはや許されない。しかしコセリウはテキストのテーマをその解釈の出発点として据え(Coseriu: 126)。すでに理解された内容を一定の表現に還元し、テキストのマクロ記号であるシニフェに何らかの特殊な表現が対応していることを示そうとする(ebd. 170)。上から下に向って枝分かれしてゆくコセリウのテキストの解釈の方法は、しかし受容者の美的観念を前提とした解釈の価値の多様化につながる。言語学的文体論が究極において文学との関わりをめざすものとはいえ、コセリウにみられるような受容者の主観を客観的な言語理論によって正当化しようとするこの解釈学的テキスト言語学の方法が普遍性をみつけるにはあまりにも遠く隔たった道のりをその先に抱いているように思えてならない。

引用文献

- 1) Beaugrande/Dressler: Einführung in die Textlinguistik Tübingen 1981.
- 2) Baumgärtner, K.: Der methodiasche Stand einer linguistischen Poetik

1969 In: Jahrbuch für internationale Germanistik.

- 3) Bierwisch, M.: Poetik und Linguistik In: Mathematik und Linguistik 1965.
- 4) Bühler, K.: Sprachtheorie Stuttgart 1965.
- 5) Coseriu, E.: Textlinguistik Tübingen 1980.
- 6) Jakobson, R.: Linguistic and poetics In: Sebeok (hg.), Style in Language 1966.
- 7) Riffaterre, M. 文体論序説 (福井他訳) 朝日出版社, 1978.
- 8) Sayce, R. A.: Die Definition des Begriffs "Stil" In: Romanistische Stilforschung 1975.
- 9) Sandig, B.: Stilistik Berlin 1978.
- 10) Seidler, H.: Allgemeine Stilistik Göttingen 1963.

(筆者: 岩手大学人文社会科学部助教授)

本稿は昭和60年度科学研究費(総合研究A,「テキスト分析の研究」,代表 脇阪豊)の補助をうけて行われた研究の一部である。